

第4章 LIFEの事例

LIFE - 自己の生きる地域と世界について学ぶ	キーワード：地域 人間と社会の普遍的な問題(世界) ローカルな視点 探究とメタ探究
長崎から学び、考える ＜配当時間数 17時間＞	
当校中学校3年生は、社会見学旅行で「長崎」を訪れている。本單元では、その旅行の導きとなる『長崎案内記』の作成をめざし、グループ毎に「長崎」に関するテーマを探究する。	

1. 単元の目標

本單元では、「長崎」に関する知識を習得して「長崎」への関心を深めながら、グループごとに「長崎」に関するテーマを追究し、その成果を「長崎」への社会見学旅行のための『長崎案内記』にまとめる。そうした諸活動を通して、以下のことをめざした。

- (1) 「長崎」という「地域」を説明する概念的知識を習得するとともに、「長崎」に対する関心を深め、意欲的に科学的探究を行う態度を育てる。
- (2) 問題を解決したり、課題を追究したりする方法を習得する。
- (3) 「地域」としての「長崎」が関係・発信している「地域」を超えた「人間と社会に関する普遍的な問題」を考える。

2. 単元の構成と特色

＜小單元1「長崎」を知る＞

生徒たちの興味・関心は、ア prioriに存在しているのではない。小單元1の「『長崎』を知る」では、本単元の第1段階として、生徒たちの「長崎」への知的な興味・関心の喚起をめざす。すなわち、「長崎」に関する基礎的な知識を、歴史と地理を中心に教師の説明によって習得しながら、生徒たちの「長崎」への興味・関心を喚起し、次の小單元2「『長崎』から学ぶ」での「長崎」探究の動機づけとするのである。

＜小單元2「長崎」から学ぶ＞

小單元2では、グループ毎に「長崎」に関するテーマを追究し、その成果を社会見学旅行の導きとなる『長崎案内記』にまとめ、これをテキストに学年全員で社会見学旅行の事前学習をする。設定したテーマは、(a)長崎全般、(b)長崎と平和、(c)浦上とキリシタン、(d)出島・新地と異国文化、(e)大浦・山手と開国、(f)雲仙・阿蘇と火山の6つである。

第4章 LIFEの事例

各テーマは、社会見学旅行との関わりで設定したものであり、特に(b)～(e)は社会見学旅行の班別自主研修の出発点(平和公園)～宿舎(大浦海岸)の順路に従って設定した。本小単元では、このようなテーマの探究を通して、「『長崎』を学ぶ」ことのみならず、「『長崎』から学ぶ」ことをも期待している。つまり、目標2・3である。本小単元で生徒たちが「『長崎』から学んだ」ことは直観的な気づきに過ぎないが、それは小単元3で確認される。

<小単元3「長崎から考える」>

小単元3は、小単元2で「『長崎』から学んだ」ことを、さらに「考える」過程である。小単元2での自分たちの探究活動を振り返りながら、その自分たちの探究をさらに探究(「メタ探究」)する。「『長崎』から考える」こととして、今回は、「長崎」が関係し・発信している人間と社会に関する普遍的な問題、「地域」を探究する方法、「地域」からの歴史叙述の3つを設定した。

3. 主題に迫るための手だて

本単元の目標の達成は、生徒たちの探究活動の質にかかっている。より高いレベルの探究を行うため、『情報整理票』を活用する。『情報整理票』には、)収集のねらい、)収集の方法と出所、)収集した情報、)情報の吟味・分析、)新たな疑問、などを記入させ、適宜それを指導しながら、探究の方向を見定めその成果をまとめさせた。

4. 単元における評価の観点・方法

次の1～3により評価をおこなった。1 毎時間の教師の観察(教師による評価)、2 『情報整理票』のチェック(教師による評価)、3 『長崎案内記』とその発表の評価(教師・生徒同士による評価)。2では、「的確な情報を効率よく収集しているか」、「収集した情報は正確か」、「収集した情報を多面的に吟味・分析しているか」という観点、3では、「論旨は明確か」、「興味や理解を促す適切な工夫がされているか」、「十分に吟味・分析された内容か」という観点から評価した。

5. 教科等との関係

生徒は各教科の学習で育まれた様々な能力を動員して探究活動を行うわけであるが、本単元では、小単元3の学習を通して育まれた能力を、地理の学び方、歴史の学び方として逆に教科に還流したい。

(右は『旅のしおり』表紙の原画：長澤亜紗美さん作)



7. 指導のポイント

< 1 . 小単元(1)「『長崎』を知る」のポイント >

小単元1は、小単元2での意欲的・創造的な探究活動のための「長崎」に関する基礎的知識の習得と動機づけの単元である。そうした小単元1のねらいを達成するため、小単元1で講義する基礎的な知識の内容は、生徒たちの「長崎」への興味・関心をより深め、円滑に小単元2の探究活動に入れるものでなくてはならない。そうした視点から、基礎的な知識の内容は、小単元2で生徒たちが追究するテーマとの関わりを規準に選択した。また、本単元の実践に先立って、課題図書として遠藤周作の『沈黙』を読ませ、その舞台となった「長崎」への興味・関心を引きつけた。

< 2 . 小単元(2)「『長崎』から学ぶ」のポイント >

小単元2は「『長崎』から学ぶ」であって、「『長崎』を学ぶ」ではない。生徒たちの探究は、ややもするとそれぞれのテーマに関係している事実の収集に止まってしまふ。あくまでも「長崎」は事例であり、それを通して、人間と社会に関する普遍的な諸問題を学習する。そのため、『情報整理票』のチェックに際し、情報の吟味・分析の指導に留意した。とはいえ、中学校三年生の発達段階を考えると、「長崎」に関する諸事実からそうした普遍的概念を把握するのは相当困難であり、ここでは直截な指導をするのではなく、人間と社会に関する普遍的な諸問題に直観的に気づくことを期待した。

< 3 . 小単元(3)「『長崎』から考える」のポイント >

小単元3では、小単元2での生徒たちの探究を、教師の指導によって「メタ探究」した。つまり、小単元2でのそれぞれの探究活動を、科学的な探究の道筋に従って構成された授業で後づけることによって、生徒たちに探究の方法を自覚させるとともに、生徒たちが習得している「長崎」に関する具体的な事実的知識を、「人間と社会に関する普遍的な問題」のレベルへ深化させようとするものである。

「人間と社会に係る普遍的な問題」は、現代世界で生起している諸問題を概念化したもの(例えば、共生 対立 文化 変化 公正 など)で、本実践では、「地域」の具体的な事実からそれらを考えることを「ローカルな視点」ととらえている。例えば、小単元3の は、「長崎」という「地域」において 歴史 をローカルな視点から考えようとした「メタヒストリー」の学習である。

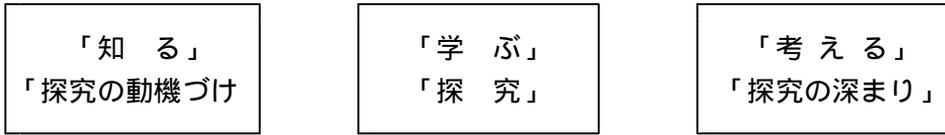


(『長崎案内記』表紙の原画：長澤亜紗美さん作)

第4章 LIFEの事例

<4. 本単元の評価のポイント>

本単元の3つの小単元は、つぎのような流れと構造になっている。



こうした流れと構造をふまえ、小単元1では主として観察による「関心・態度」の評価、小単元2では『情報整理票』をもとにした「思考・技能」の評価と『長崎案内記』をもとにした「知識・表現」の評価をおこなった。それぞれの評価の観点も、『6. 単元計画』のなかを示した通りである。また、小単元3ではレポートで評価したが、小単元3の『『地域』からの歴史叙述』については、校内実力テストの選択教科において、以下のような論文テストを実施した。この問いは、社会科の各分野に関係する8問のうちの1問として出題したもので、本単元の授業を受けたある生徒は次のように答えていた。

問 ある歴史学者は、歴史教科書について、次のように言っています。この歴史学者が指摘している「したこと史観」には、どんな「落とし穴」があると思いますか、説明しなさい。

歴史の教科書をずっと読んでいて、「変わっていないなあ」と思ったことがあります。それは何かというと、「誰それが、これこれのことをした。そして情勢や制度はこのように変わった。」こういうスタイルで書かれていることです。「何々をした」このことばかり書いてある。…「何々をした」ということばかりを追求する、それを仮に「したこと史観」と名づけましょう。この「したこと史観」というものに自分たちがとらわれてしまうと、じつはいくつかのものが見えなくなってくるのです。それが歴史だと思えば、過去がよくわかったように思いながら、じつは「落とし穴」にはまってしまうのです。

(鹿野政直『歴史を学ぶこと』)

歴史教科書の「したこと史観」とは、歴史教科書に書いてあることは、その当時の支配者、天皇であったり、武士であったりが「したこと」の歴史であるということである。この歴史学者の言う「落とし穴」とは、支配者の「したこと」に対して、支配される者の「されたこと」が見えなくなってしまうということである。私たちは、日頃教科書の「したこと」だけを見て、歴史を学んできた。しかし、その歴史は、支配する側から見た一面にすぎず、支配される側の歴史は、ほとんど触れられていなかった。その支配で、どういった影響があったのか、生活がどうかわったのかは、理解できていない。それを見えないまま放っておいて、「したこと」の歴史が全てだと思ってしまうと、もう「落とし穴」に落ちているのである。